

令和7年度 学校評価表

関わりの力をもち、自分を表現することができる児童の育成 ～人は人の中で人になる～

学校教育目標		関わりの力をもち、自分を表現することができる児童の育成 ～人は人の中で人になる～												
a ミッション	主張性と規範意識を身に付け、心を育てる小中連携教育の推進					a ビジョン	自ら学ぶ意欲を培い、基礎・基本の学力を確実に習得させる学校 自己コントロールができる、協働的な学びの場の中で自己肯定感を育む学校 自らの健康に関する課題を明らかにし、自律的に解決できる児童を育む学校 地域・保護者と共に教育活動を創造する学校					尾道市立栗原北小学校		
領域	b 中期経営目標	評価計画				自己評価				学校関係者評価			改善計画	
		c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月 g達成値	1月 h達成値	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価 イロハ	l コメント	m 改善案		
児童の育成に関わること	学知力識をの育理解する質を高め、確かな	「自ら学ぶ意欲」を培う教育環境を構築する。 基礎・基本の学力を確実に習得させ、論理的思考力、表現力を培う。	・「栗原北小」学びのスタンダードの定着を図る。 ・フレームリーディングによる「読む活動」の充実を図る。 ・読解力を支えるベースとして読書活動、NIE活動を活性化させる。 ・算数科において、1年は少人数学習、2年・4年・5年・6年は習熟度別学習を展開し、基礎学力の定着を図る。	「自律的学習動機尺度」の比較により、内発的動機づけが有意に向上する。 標準学力調査（国語科・算数学科）において、全国平均より向上する学級数（通常学級） 国語科（思考）、算数学科（知識）の学期末テストにおける学級平均が期待値との比較において3ポイント向上する学級数（通常学級）	1%以上 (6月12月比向上)	74%	—	—	・学習意欲を見取る児童アンケートにおいて、肯定的評価の割合は7.4%と高かった。しかし、約3割の児童は、主体的に学ぶ意欲や意欲が乏しい状態にある。 ・学期末テストの結果において、国語科が2/8、算数学科が3/8どちらも目標値を達成することができなかつた。国語科では、物語文に比べて説明文に課題が見られ、算数学科では、基本的な計算などの定着に課題が見られた。	○	・課題のある子にはつまづきの分析を、なぜ説明分が弱いのか個々の傾向から分析をし、次の手立てを練ってほしい。次を楽しみにしている。 ・物語文を読み取ることができる子ども達であるなら、説明文もクリアできそうと思ふ。 ・物語文の点もだが、子ども達のつまづきを見つけ次の指導をしてあげてほしい。 ・国語科の説明を読み解く難しさは、論理的思考を身に付けるだけではなく、日常生活においても相手の意図を正確に理解するための工具となる。文章の成り立ちについて繰り返し学ぶことで言葉の力を伸ばしていただきたい。 ・「計算がなんなく苦手」という気持ちは意欲低下に繋がるかもしれない。楽しく計算ができる工夫があると良いと思う。	・より関わり合いを大切にした授業を開催し、児童が主体的に学びたいと考える授業へと改善していく。 ・授業において、自分の考えを持たせる時間を十分に確保し、書いたり交流したりして、一人一人が自分の考えを持つことができるようにする。また、説明のモデルを示し、筋道を立てた説明を意識して発表させる。 ・席タイムや家庭学習を充実させ、音読・漢字・計算を繰り返し行い、基礎的基本的な学力の定着を図る。		
	豊かな心や健やかな体を育成する	自律的な行動、他者意識をもった言動ができる児童を育てる。 協同的な学校生活の場を意図的に設定し、自己肯定感、役立ち感、憧れ感、リーダーシップ、フォロワーシップを醸成する。	・隔週で「コミュニケーションタイム」を設け、他者理解の育成を図る。 ・クラス会議を定期的に開催し、自治的風土・共同体感覚を構築する。 ・ファミリー活動（掃除、遊び、行事）による異学年交流を促進する。 ・集会やファミリータイムなど、子どもたちの主体的な表現の場、チャレンジの場を設ける。 ・不安傾向を軽減させるプログラムを継続実施する（第5学年対象）。 ・思いやりの木の取組を推進する。	学校生活に関するアンケートにおいて、①ファミリーやクラスに関する項目②「学校が楽しい」の項目の肯定的評価の割合 アセスの生活満足感50以上の学級数	肯定的評価 ①80% ②80%	92.6% 290.7%	114 %	A	・学校生活に関するアンケートにおいて、肯定的評価をした割合は高かった。クラス会議や集会活動、ファミリー活動を通して、自治的風土を構築するとともに、「あだなたさ」をキーワードにした関わりを意識して取り組むことができた。また、コミュニケーションタイムを通して、集会などが児童自身や他の児童との理解を深める機会となり、集会感覚が高まっている。 ・クラス会議のルールは重要で、活動を通して子どもの主体性・自主性を育てていただきたい。 ・児童の肯定的評価の高さは、素晴らしいと思う。児童一人一人への支援・フォローも引き継ぎお願いしたい。 ・アセスの結果からも多くの児童が生活満足感が高いことが分かり、多くの児童が「楽しい」と感じながら過ごしていることが分かった。一方で、不満や不満を感じている児童がいる感覚もあって、いる児童もいることをもう分り、心に寄り添いながら、担任一人一人で見えない組織で丁寧な指導・支援が必要と考える。	○	・子ども達に居場所があること、安心できる学校であること、情緒の安堵が伝わる場であることが、学生生活の全ての基盤となる。 友達に受け入れられ、学校が楽しい場所であれば自己的力を発揮できると思う。 ・クラス会議のルールは重要で、活動を通して子どもの主体性・自主性を育てていただきたい。 ・児童の肯定的評価の高さは、素晴らしいと思う。児童一人一人への支援・フォローも引き継ぎお願いしたい。 ・ファミリー運動会を見た際、5月には時に5・6年生の頃もしさがうかがえた。今後も多くの行事を通じて成長していく姿を楽しみにしている。	・クラス会議やファミリー活動、思いやりの木など、1学期の取組を継続して行う一方で、「何のために行っているのか」を再確認し、より全校で統一した取組となるよう、研修等で振り返り改善につなげる。 ・ファミリー活動を意図的・計画的に仕組む。その場でやって終わりではなく、振り返りや次の活動に繋がるような声掛けを行っていく。 ・アセスの分析をもとに、個に応じた指導・支援を行っていく。また、個人面談週間を設けたり、必要に応じてスクールカウンセラーと繋げたりなど、児童の心に寄り添いながら支えていく。		
	自らの健康に関する課題を克服するための実践を自律的にできる力を培う。	・月に2回以上、食育に関する動画や写真を使った指導等を栄養教諭と担任で協力して行う。 ・委員会活動を中心に、配膳時間の短縮の取組を行い、食事時間を確保する。また、食に関する啓発活動を行う。	給食に関するアンケートにおいて、①「好き嫌いせず食べようとしている」、②「食べ物を大切にし、残さず食べるようしている」の割合 主菜・副菜の残食率の割合	肯定的評価 ①80% ②90%	81% 残食率 4月 5月 6月 7月 8月 9月	89.2% 6.1% 7.0% 8.2% 7.0%	101 % 99%	A B	・給食に関するアンケートにおいて「好き嫌いせず食べようとしている」「食べ物を大切にし、残さず食べようとしている」の肯定的評価が達成できた。要因としては、昨年度に引き続き、担任と栄養教諭が連携して、毎月の配膳時間などを考え、毎月の食事内容を予め決めていたり、給食用の器具や調理の様子の動画などによって、食べへの意欲が高まっていると考えられる。 ・残食率が平均的に1%を越えている。野菜の好き嫌いの実態にも変化が見られる。適度に体を動かす習慣をつけ行なってください。	○	・食育に関して、給食時間だけでは食体験をカバーできないと思うが、色々な食材や献立を知ることは無駄ではないと思う。 ・4月に比べ、6・7・8月の残食率が高いのは、暑さで食欲が落ちているというところだろうか。細い体型の子どもも多いので、しっかり栄養を取ることができてほしいと思われる。 ・頭痛やめまい、貧血といった身近な症状の改善に、食事からの栄養補給が大事であることを周知付けて啓発していただきたい。	・担任と栄養教諭や養護教諭で連携し、食事の楽しさや健康な体づくりに関する指導を工夫する。 ・食に対する关心を高める取組を、委員会活動等を中心に行う。		
わど るこ と保 護者 者に 関	育社会課会程にを開実か現れするたる教	地域社会の中に位置付く学校をめざし、教育活動へ積極的な協力者を得る。	・保護者、地域に教育活動の具体的な展開について広報し、理解と協力を得る。	地域のゲストティーチャーから学ぶ授業を展開する。 学校教育活動（行事等）後の地域、保護者アンケートにおける肯定的評価の割合。	ゲストティーチャーとの授業 6/6学年	5/6学年 100%	83.3 % 100 %	B A	・野菜作りや耕作放水の水質調査、新聞出前授業や非防犯教室など様々な活動において、地域の方々ゲストティーチャーとして来校していただき、話を聞いたり交流したりして、学習を深めることができた。しかし、時間の制限など難しかった面もあり、目標達成を上回ることはできなかつた。 ・運動会実施後のアンケートでは、児童の姿や取組についての肯定的評価や多くの感想をいたいたことができた。	○	・子ども達の姿を通して保護者に信頼されていることは素晴らしい。 ・SNSの取組を高年学年以上から実施していることが参考になった。 ・今後より計画的にゲストティーチャーとの授業を行っていただきたい。	・引き続き継続して実施し、積極的な活用を行い、より深い学習へとつなげていく。 ・実施日に毎日で連携することもあつたので、計画的見通しもして連絡や調整を行なう。 ・2学期以降の行事においても、行事のねらいや様子を伝信やメールなどで発信し、地域や保護者の理解と協力を得られる取組を行なう。 ・アンケートの結果や意見をもとに、来年度に向けた改善を図っていく。		

※ 部は昨年度からの追加・修正部

【自己評価 評価】
A : 100 ≤ (目標達成)
C : 60 ≤ (もう少し) < 80

B: 80≤(ほぼ達成)<100
D: (できていない)<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。口：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。